

There is(are)～.「～がある（いる）」の使い方をマスターしよう

英語 第2学年

志賀町立志賀中学校・教諭

1 事例の概要

現在の中学校英語教育においては、生徒の英語に対する興味や関心を高め、基礎的・基本的な内容の定着を一層図るとともに、実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことが大切であると指摘されている。特に、実践的コミュニケーション能力の育成を図るために、言語の実際の使用場面に配慮した指導の充実を図ることと、音声によるコミュニケーション能力の育成に重点を置くこと等が求められている。

このようなねらいの下、これまで授業においてはコミュニケーション活動を積極的に位置付け、その指導を展開してきた。しかし、生徒の英語運用能力がこちらの期待通りに向上してきたかといえはその確たる変化は認めにくいのが現状である。おそらく、こちらが会話や表現活動を重視し過ぎるあまり、そのベースとなるに必要な文法指導や繰り返しのドリル学習を以前ほど十分に指導していなかったのかもしれない。（pattern practiceも含めて）

また、これまで実践してきたコミュニケーション活動の達成目標が、意味理解とその形式の定着を目指して行ってきたようにも思われる。教室で学んだコミュニケーション活動が、たとえそれが定着できていたとしても、教室の中でしか通用しない、利用価値の狭いものではなかったかと反省される。そこで、読むことや書くこととの関連を図り、評価を指導に生かす視点を大切にしながら、文法指導とコミュニケーション活動をさらに有機的に関連付けた指導が効果的ではないかと考え、取り組むことにした。また、指導する言語の使用場面の意識化を図り、文法理解のための文法指導に終始するのではなく、得られた文法知識を生徒がその有効性を理解し、意識的に具体的に活用できるような場の設定を心がけていくようにした。

2 実践内容

(1) 評価を指導に生かし、正しく「書くこと」の定着を図る実践例

① 評価活動を通して見取る生徒のつまずき

2年生で、存在文とも呼ばれる新文法事項 There is ～. の導入部分で、まず別紙のようなワークシートを使用した。この表現ならば、新構文ではあるが比較的スムーズに理解されとの予想のもと、簡単な説明や、口頭練習により実際に書く作業に入り、授業後に回収した。ここで評価をしようとしたのだが、そこに新しい発見があった。別紙資料①のワークシートは比較的英語全般に関心を持ち、書くことについても概ねどの単元でも達成率の高い生徒のものであるが、最後の文章表現で課題が見られた。それは、‘There’が書きなれた（耳慣れた？）‘They’と誤記され、また冠詞の位置も違っている。このような混乱傾向は他の生徒のワークシートにも見られた。

② 前時の評価を生かした授業の工夫

前時で未定着と判断したこの構文をしっかりと指導する必然性を感じ、次時に書き取りが多くできる活動を取り入れることにした。前時の課題を受け、授業の最初で再指導を行った後、新たに別紙資料②を配布し生徒の理解度を測った。資料生徒は日頃の見取りでは常に時間ごとのねらい（評価規準）を達成しているわけではない抽出生徒だが、‘two’が‘tow’に、‘desk’が‘besk’と書き間違えられている以外は完全に表現できるようになっているので新構文が定着しているものと判断した。このような指導の後、定期考査では本文法事項の定着度を再確認するため別紙資料③のような問題を設定した。

3 指導の実際

段階	学習内容・活動	評価 (◇) と支援 (◎)
導入 10分	1 warm-up activity ・ 構文の聞き取り ・ 書き込み練習 ・ variation reading	・ be動詞と名詞の関連を強調して読む ・ 何回も繰り返すことで構文の定着をはかる ・ 読みにより構文に慣れる
展開 30分	もう一度「～があります。」の文をたくさん作ろう。(B規準の確認課題) 2 There is 単数名詞 There are 複数名詞 ・ ペアで確認する 3 作った文章を疑問文に直し ペアで練習する Is there～? Yes, there is. No, there isn't. Are there～? Yes, there are. No, there aren't.	・ 机間を回り、個別指導を行う ◇ 存在文を用いた英作文をワークシートに記入する (シート分析) B: 新構文の意味を理解して表現することができる。 □ シート以外の場面を設定し文を作る △ 構文を表示しblankに名詞を入れさせて表現に慣れる

C-1 指導案

C-2 ワークシート等の工夫 (別紙資料①②③)

4 成果と課題

(1) 指導に生かす評価の分析 (結果分析・原因分析)

以上のような一連の指導の結果、生徒は「書くこと」については書き換えなど平易な文章変化の作業についても、実はそれを構成する複数の文法事項を理解していなくては正答できないということが再確認できた。これは、指導者にとって『確かな学力』定着のために基礎・基本の確認を絶えず生徒に求めていかななくてはならないということにつながると考えられる。また「文法」や「語句・基本文」等については、単元テストや定期テストで「正確さ」を重視した絶対評価を行い、その結果を生徒にフィードバックすることが大切なことであると思われる。

(2) 今後の研究の方向性

自分の指導を振り返れば、指導の根底には「読むこと」「書くこと」があり、それを基底にして実践的コミュニケーションの能力や、態度を引き出す指導展開をしてきているように思う。しかし、日々の英語学習において「文法」や「基本文型」を学習しただけでは、英語科の目標である実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことにはつながらない。自分の考えていることを端的に書き表せば「文法・語句・基本文の習得」⇒「限定的コミュニケーション活動への展開」⇒「実践的コミュニケーション能力の基礎」という流れになる。

今後、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の各領域の言語活動のバランスや各領域相互の関連に配慮しながら「書く力」の育成から始めて「話す力」へ発展させる展開について研究を進めてみたい。